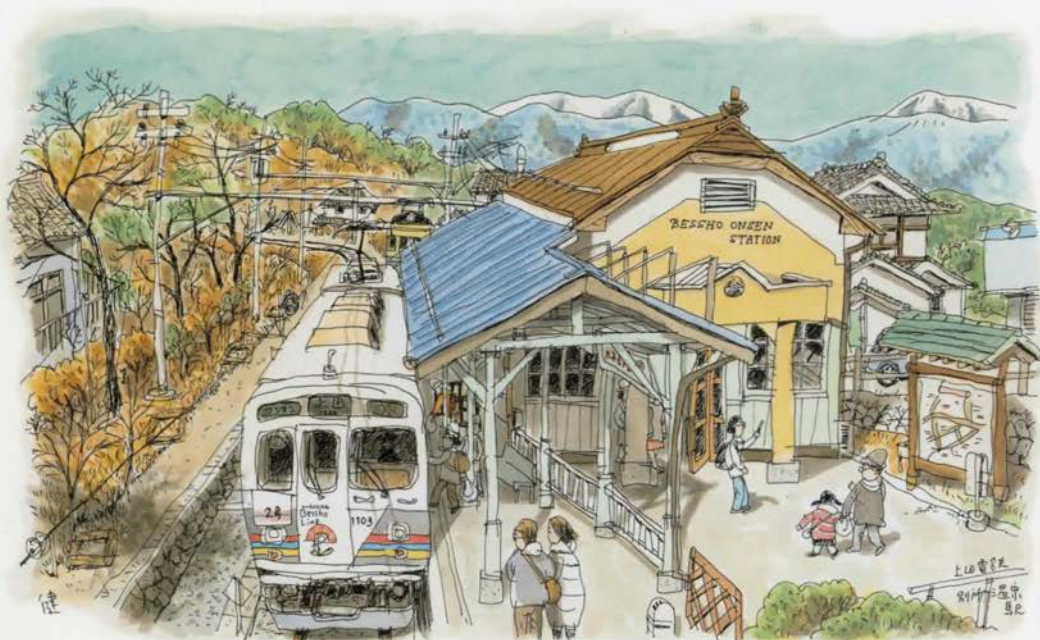


浄土

monthly
JŌDO

2012 $\frac{2}{3}$ February
March



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

上田電鉄別所線 別所温泉駅

別所線（べっしょせん）は、長野県上田市の上田駅から別所温泉駅までを結ぶ上田電鉄の鉄道路線である。主に別所温泉へ行く湯治客のために1921年に開業した。

かつては側面に丸窓を持つ「丸窓電車」で有名だった。70年代には廃止の方針が示されたが、地元の運動や軌道整備補助金の交付が決まったことで危機を免れ、1993年には元東急7200系電車を投入し冷房化を果たした。

2005年、上田交通から鉄道部門が分社化され、子会社の上田電鉄の運営となった。

2005年8月に上田市が分社化後も支援継続することを発表したが、現在もその存続は予断を許さない状況が続いている。

2/3月

浄土

2012/2・3月号 目次

日本人の生きる力.....	松平實胤	2
会いたい人 奥田瑛二さん①.....	関 容子	8
小説渡辺海旭	前田和男	16
江戸を歩く第43回.....	森 清鑑	24
響流十方	小村正孝	32
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
園児の句集		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 絵図に見る法然上人



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

日本人の生きる力

——大震災がもたらせしもの——

愛知県犬山市寂光院 山主

松平實胤

敬いと感謝と怖れ

春は花 夏はとき 秋は月 冬雪さえてすしかりけり

これは道元禪師のお歌です。日本の四季の美しさを三十一文字に詠み込んでおられます。一九六八年ノーベル文学賞を受賞された川端康成氏がストックホルムの受賞記念講演でこの道元禪師の歌を引き、「美しい日本の私」と題して講演をされました。なるほど日本の四季の自然の姿は趣深く美しいです。いや更に日本は二十四の季節をもつ国（二十四節季）と言われます。これから本格的な春に向かって、立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨……日本人は微妙な風の香り、水のぬくもりに季節を感じ取る敏感なまでに感受性に優れているのでしょうか。

また自然の恵みはとても豊かで、海の幸、里の幸、山の幸、とにかく四季折々おいしいものに囲まれて生活してまいりました。ですから日本人は古来より自然を敬い、自然に感謝し、自然を慈しみ、自然と共に生きてきたという長い歴史があります。

一方日本は地震、津波、台風、豪雨、火山爆発など、自然災害の多い国です。到底人智の及ばない、人が抗うことのできない天地自然のはかり知れない大きな力に日本人は畏怖の念を抱き続けてまいりました。ですから、自然に対して日本人特有の生き方のコツ、智慧というべきものが知らず知らずのうちに日本人に刷り込まれ、それが「生きる力」の源として伝承されてきたのでしょうか。

諦観―あきらめて、あきらめない

それは間違ひなく仏教の「無常観」、「諦観」^{ていかん}に基づくものであると思います。無常は諸行無常「およそこの世に存在するもので同じ状態にとどまるものは一つもない、すべて一瞬一刻変化して止まない」ということです。桜の開花を待ちわびるのも束の間、間もなく散り急ぐ花びらにこの世の無常を感じます。しかし、「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおり、無常の故に今しばらく辛抱我慢すれば、夏の暑さも必ず秋風のたつこととなり、冬の寒さも必ず温もりのある春になるといふことで、「諸行無常」は希望の言葉でもあり、救いの言葉でもあります。

諦観は「四諦八正道の『諦』、現実をありのままに観る、納得する、悟る」ということです。例えば、津波で家族を失い、家を失い、町が流された、その現実をありのままに諦め（明らかに観、納得す）れば、そこから先は（相手が敬いと感謝と怖れの対象である自然なら）その状況を呪うことなく爾々とそれを持ち越えて前に進む以外に道はありません。日本人は有史以来、天災地変に見舞われる度ごとに、また戦禍にさいなまれる度ごとに、それを持ち越え、立ち直り、復興する、その繰り返しが日本の歴史であったといってもよいでしょう。

「日本人の生きる力」は日本の自然とともに育まれてきたのだと思います。それは無常なる現実を「あきらめ（明らかに観）れば、しばらく力を落としてやる気を失っても、早晩それを持ち越える、やり抜く、「あきらめない」ということでしょうか。

この平成24年の年頭に、先の大戦で空襲を受けて廃墟になった国土、伊勢湾台風で壊滅

状態になった伊勢湾岸の地、阪神淡路大震災の激震の地に、その被災の爪痕を見つけることは困難です。被災された人々の心の傷はどれほどの年月をかけようと癒えることはないでしょうが、今回の東日本大震災の被災地も、「日本人の生きる力」で早晚街並みは復興するであろうことは疑いの余地はありません。

業（自業・共業・新業）

しかし、今回の大震災には復興を妨げる深刻な問題が付きまといまふ。言うまでもなく福島原発事故です。どこまで被害が拡大するか見当もつきません。風評被害も含めてまさに不気味です。とにかく人智の到底及ばない、扱いが極めて厄介で、最終処理の方法も手探りの、危険極まりない存在の原発に市民権を与えるために、国を挙げてなされた洗脳教育の上にできあがっていた「原発絶対安全という安全神話」が「（人智の）想定外」という一言で簡単に崩れ去りました。もともと神話は神様の世界の話です。「神様の世界では」といふ但し書き付きの「絶対安全神話」です。しかし、想定は「この世、人の世」の人がしています。極めて傲岸不遜な話ですが、しかし、私も今まで湯水のごとく電力を消費して原発の恩恵に甘んじてきた一人です。批判は天に唾するようなものです。そんな私が、今回の地震、津波、そして原発事故の被災地の皆様のご苦勞を仏教徒としてどのような受け止めたらいいのでしょうか。いや天災地変、自然災害は時・所を選びません、戦争もあとを絶ちません、毎年どこかで起こります。

さて、仏教では誰も抗えない大きな力、たとえば自然災害のような天災地変、また戦争のような個人では到底抗えない大きな力の結果を沢山の人が同時に被る場合、「共業ぐごう」のし

からしむるところ」と表現します。

業とは行為・行動・やることなすことを意味します。しかし、なぜか業というと重い響きがあります。実は行為はやりっぱなしでは終わりません。必ずその結果、その影響力が付きまといまふ。それがどのような形でいつ現れるか行為の時点では極めて不可思議です。ので、業には特有の陰湿な響きがあるのでしょう。「自業自得」という表現はよく使うところですが、これは自己の行為は無限に責任を負っていくその覚悟が必要だとの戒めでもあります。

代受苦

しかし、今言う共業はその人の力の到底及ばないところで起きた天災です。その結果、その地域の沢山の人が同時に御苦労をされておいでになるのです。自然災害は時・所を選びません。今回は東日本でしたが、東海、東南海地震もいつ起きてもおかしくないと警告されています。となれば、東日本の皆さま方が今回は代わりに苦を引き受けて下さった「代受苦者だいじゅくしや」と受け止めます。代受苦という行為は菩薩様の修行です。被災地でご苦労されておいでになる方の苦しみは量り知れませんが、私みたいなものでも、その苦しみ悲しみが少しでもわかる自分であれたいいと念じています。更に今回の地震津波で沢山の方々が亡くなされました。我が身に変えて苦を引き受けられた菩薩様です。まさに菩薩行を完成され、成仏され、お浄土に往生されました（たとえ今まだ行方知れずの方だとしても間違いなく成仏されています）。皆様方に折あるごとに、敬いと感謝の心で謹んで黙祷をささげたいと思います。

大震災がもたらしたもの

この大震災は私達の意識に大きな変化をもたらしました。その一例が節電です。命への関心も高まりました。あらためて人は誰しも裸で生まれて死んでいくことを確認しました。とにかく今私達は「自分がどこから来たのか、何のために生まれ何のために生きるのか、死んだらどこへ行くのか、一体自分とは何者なのか」という問いにはつきりとした解答を見つきたいと願うようになったのではないのでしょうか。

間違はなく「自業自得」の積み重ねで今の私があります。悔いても悔いきれない、後悔先立たずで、結果を変えることはできません。年を重ねて情けないとは思いつつ、未来はと言えば、不安と恐怖ばかりがよぎります。

私達に残された希望は「新業」でしょうか。今ここでする行為が未来を開いて行くのです。仏教徒らしく、「未来良かれ」と今・ここを精一杯生きる、これからの業、新業を大切にしていくなければなりません。

まさに人生は修行です。思う通りにならざることをどれほど辛抱我慢こらえる堪えることができたかが問われ、今をどれほど精一杯生きることができたかが問われ、未来をどれほど仏さまの御計らいとお任せできたかが問われ、最後は誰しもが最難関の「死」を経験して人生は完成する、そんなことを遅ればせながらわからせて戴いたような気がします。

連 載

会いたい人 関 容子



奥田英一
さん
①

撮影／タカオカ邦彦

奥田瑛二を初めて見たのは81（昭和56）年、そのころNHKテレビでは毎晩、銀河テレビ小説と称する二十分の連続ドラマがあったが、その『愛・信じたく候』の主役、石川啄木を演じる俳優に注目したときだった。薄情で身勝手であらしがなくて、でも、どこか純粋なところがある役で、そこが女を魅きつける。何よりもジメツとした男の、えた色気がある。こういうデカダンな感じの出せる俳優はそれまであまりなかったと思う。

よほど評判がよかったとみえて、その翌年も銀河テレビ小説の『憤激の恋』に出演。またその翌年にも『宵待草』に竹久夢二役で主演している。80年代、三十代の奥田瑛二はトレンディドラマで大活躍だった。

私がナマの奥田さんを見たのはそれから十五年後、六本木のホワイトというクラブ。勘三郎（当時勘九郎）さんと何人かでいた席に、向うから奥田さんが移ってきてしばらく話していった。そのとき、もうすぐ新宿梁山泊と

いうアングラ劇団のテント芝居の『四谷怪談——十六夜の月』に出るという話になって、その場にいた人たちがみんなで観に行った。奥田さんは民谷伊右衛門にあたる伊策という役。虚無と頹廃を絵にしたような浪人者の黒羽二重の着流し姿がさすがに素敵だったが、どこか動きが不自然に見えた。あとで勘三郎さんから聞いたところでは、稽古中に足の靭帯を傷め、テーピングで固定して毎日の舞台を片足でつとめていたのだそうだ。

あの『四谷怪談』が96（平成8）年で、奥田さんは五十歳。その著書『男のダンディズム』によれば、「これでガスが切れたな、最後の一滴がポトンと落ちたんだと思った」そうで、こころで人生を見つめ直し、「四十歳で志した映画監督になろうという思いを五十代できちつと形にしようと考えた」という。

奥田さんが五十代で実現させた監督作品は、『少女（*an adolescent*）』（01）、



映画俳優を志した小学5年生の奥田さん（上）

『るにん』(06)、『長い散歩』(06)、『風の外側』(07)で、四作とも素晴らしかった。

それで今回のインタビューでは、最初から映画作りの話にばかり集中してしまっただが、やはりその話はあとで書くことにして、まずどんな少年時代だったのか、から始めよう。

「僕が映画俳優になりたい、と思ったのは小学校五年生、九歳のときです。この空息しそうな小さな村社会(愛知県春日井市)からどうやって脱出できるんだろう、と考えたときに、そうだ、東京へ行つて映画俳優になろう、と思つたわけです。あのころ映画『丹下左膳』の友柳太朗にあこがれて、僕はあれになりたい、と思つたんですね。で、俳優になるためには容姿がよくて、背がスラッとしてなきゃならない。そうなるために、僕は中学の野球部に入りました。野球の選手はみんな背が高いから、という実に単純な思考ですよ(笑)。高校ではラグビー部に入った。ここで闘争心と根性を養って、売れないで食うに困つても、

粗食に甘んじて暮らせる根性と体力を養おう、というわけです。こうなると確信犯ですよ。そして第二の関門は、東京へ行くには東京の大学へ行くしかない。親父は市会議員ですから長男の僕を地元置いて跡を継がせたいという考えがある。当然、名古屋の大学へ行け、と言つたろう。そこで一計を案じて、これからは視野を広くして見聞を広めなきゃいけない。それには東京へ出て、政治の勉強にいそしんで、必ず帰ってくるから、って。もちろん嘘ですよ(笑)」

脇道にそれるが、先ほど奥田さんの尊敬する映画監督の名を挙げてもらつたら、黒沢明、熊井啓、神代辰巳、小津安二郎と、日本人監督ばかりだった。私は特に『長い散歩』の美しい自然描写や詩情漂う撮り方に少なからずフランス的なものを感じていたので、ちよつと意外な気がした。

「僕は外国人じゃ撮れない、日本人の生理で映画を撮ってますからね。しかし僕の映画は

フランスっばい、ってよく言われますよ。それでおいしいのは、僕は子供のころ、フランス人だって勝手に思いこんでた時期があつて（笑）、つまり親戚連中は縄文人よろしく全員背が低くて、僕だけが手足が長くて背が高かった。みんなで集合写真を撮ると、僕だけが首一つ、出てましたから。よくぞ神様が僕の背を伸ばしてくれたと感謝しているんです。たしかにフランス映画にあこがれていたこともありましたね」

映画俳優になりたいという望みを、奥田さんは両親に語ったのだろうか。

「高校のころ、一度だけ親父に言ったら、とろくさいこと考えとつて、このたわけが（笑）、ってぼろくそに言われたし、一つ年上の姉貴にも、あんたなんかなれるわけないでしょ、と一笑にふされた。でもお袋だけが、あんたの人生だよね、やりたいことをやればいい、と言ってくれました。僕は子供のころから高校を出るまでずっと、うちへ帰れば、お母ち

ゃん、お母ちゃん、と探して回る甘ったれでしたからね。それでいてお調子者のホラ吹き小僧、大言壮語する夢見る夢男くんでした。だからこんな片田舎で俳優になると言っても、誰も信じなかったわけなんです」

それでも奥田さんが父親から上京を許されるための条件は、地元出身の政治家の家に寄宿して、大学へ通うこと、だった。

「その自民党代議士先生の、親父は後援会長でしたからね。それで半年間必死で受験勉強をして、明治学院大学の法学部に受かったので、十八歳で晴れて上京です。しかしちょうど70年安保で学校が閉鎖されたのをキッカケに、僕は意外にも政治活動に熱中したんです。選挙カーに乗って演説したり、陳情の人たちの応待をしたり、修学旅行の生徒に議事堂の中を見学させたり。そうするうちに自分も偉くなつた気で、どんどん傲慢になつていくんですよ。二年経って二十歳になったとき、あれ？ 東京へ何のために来たんだっけ？ と

ふと我に返ったんですね」

政治家の家を出た奥田さんは、初志貫徹をめざすために、天地茂が高校の先輩であることを調べた上で家に日参し、付き人にもしてもらった。二枚目の奥田さんは女性にもて過ぎて、仲間からのやっかみに遭い、次に伊東四朗の付き人になるが、ここでも同じことだった。

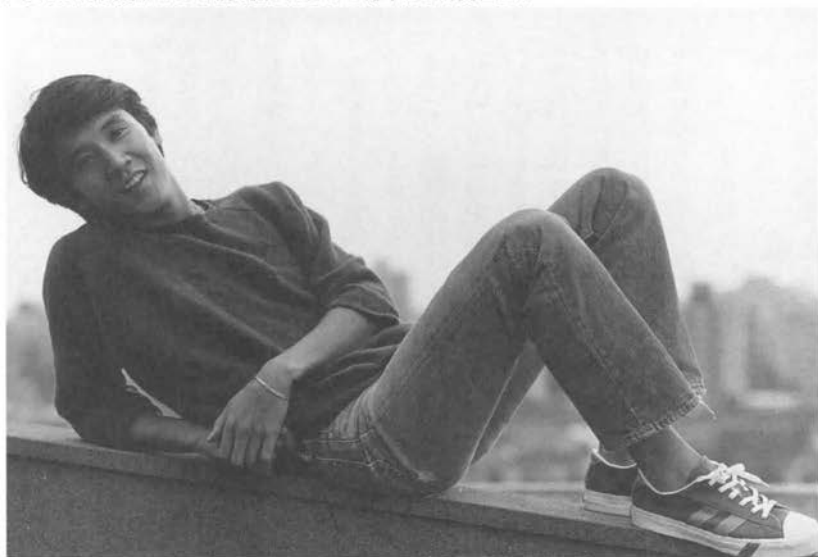
「モデルとか水商売のアルバイトとか、いろいろやってるうちに、親父からは勘当同然になって、故郷とは音信不通状態。日々汚れていく自分にいや気がさして、あるとき思い切ったアパートを出るんです。家賃もたまってたしね。代々木公園の芝生に寝ころんで青空を見上げたら白い雲が浮かんで、そのうち蟻が来たりして、ずうつとそうやって空を見上げながら、十八歳で東京に出て来て、あと一年で三十か……。よし、三十一歳の誕生日までに売れなかつたら、八が岳のふもとにも行って百姓をして暮らそう、とそう決心し

たら急に腹が減ってきて、富が谷にモデル時代の友だちがいたからそこへ歩いて行って、トントンとノックしたらガールフレンドと一緒に素麺ゆでた。シャワーあびさせてもらって素麺食べた。それからパーティーに行くけど一緒に行くか？ 会費は三千円、って。そのとき僕の所持金は五十円。金を貸してくれれば行く、って言うて出かけた先が、六本木のディスコのすごいVIPルームのフロアだった。そこでのちに女房となる女性と知り合うことになるんです」

奥田夫人は人も知るエッセイストの安藤和津^つさん。祖父は元首相の犬養毅、父は元法相の犬養健、評論家の犬養道子の異母妹にあたるという、名門の令嬢だった。パーティーで出会った二人は、すぐに相惚れとなる。

「それからどんな運が向いて、俳優への道が開かれるわけなんです。それにちよつと不思議なことがあるんです。二十一歳のとき、渋谷のセンター街を歩いてたら、路地裏

ハンサムで長身、まるで絵に描いたような青年だった奥田さん



に明暗と書いた行灯並べて占い師が五人くらい店を出してた。五百円払って、俺、俳優になれるか、って訊いたら、右手を見て、ハァー、ダメだね、この手相では。じゃあ左手も、って言ったら、あと五百円（笑）。そしたら、ウーン、ってうなつて、二十九歳か三十歳だなあ、俳優として芽が出るのは、って。ショックでしたよ。だって今二十一だからあと九年もある。そのとき虚ろな気持ちで帰ったけど、代々木公園で青空見てたのが二十九歳の三月。僕の誕生日は十八日で、その一歩手前ですよ。それまではオーディションに落ちっぱなしだったのが、彼女に出会ってからは次々に受かって売れ始めるんです。それで思ったのは、あのエセ占い師の肉体に天の神様がいつとき降りてきて、目の前のこの若造を今スターにすると、調子づいて二、三年でダウンする。こういう増長天には徹底的に苦労させて、挫

折させて、精神を強くしなくちゃいけない、
って神様が仕組んだんだ、ということ。その
大切な九年間だったと思うんです。二十九歳
ぎりぎりまでホームレス同様の僕と、セレブな
令嬢がある日巡り合って、五か月で婚約して、
八か月で結婚するわけですから、運命の出会い
としか思えませんか」

奥田さんは知的に自己分析のできる人だ。

和津さんとの結婚の許しも思いがけずスムーズ
に行ったらしい。

「母親に会いに行くのに、紺のブレザーとズ
ボンはあるけどいい靴がない。和津さんに五
百円借りてパチンコ屋へ行って、よし勝負
だ！ それで三千円儲かったんで靴を買って
行きました。そしたらすごいソファアに座
ってて、あなたお祖父様はどういう方？ っ
て身元調べですね。あ、水呑み百姓です。お
父様は？ 市会議員です。僕は俳優志望で、
大学を除籍になって、もがいている若造です。
あらそう、あなたって正直な人ね。みんな虚

栄心みたいなものがチラチラするんだけど、
水呑み百姓だなんて、もうちょつと違う言い
方もあるんじゃない（笑）。私、気に入った
わ、って。和津さんはそのとき既に婚約して
て、そちらへ嫁げば大邸宅で庭の池には太鼓
橋、という生活だったんでしようけど、僕に
出会って、じゃあ私も仕事をしよう、あなた
も売れない役者だから、ってことになったん
です」

それが安藤和津さんの華麗なマスコミデビ
ューのきっかけ、ということか。

「ああいう世界の人って不思議なもので、私
仕事しまあす、って手を挙げると、テレビ局
がいつせいに飛びつくんですね。リポーター
とか司会とか、いろんな仕事が決まって、た
またま愛知県でファッションショーの司会を
したのをうちの親父が見に行って、寄りなさい
よ、って言ったらそのまま一週間くらい居
ついちゃった（笑）。そういう人なんです」

（つづく）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十九回

第二部

ライン
来江の古城遙かなり

仏教は

「貧困」に何がなせるのか



「救貧」は社会主義者の専売特許か

渡辺海旭は十余年にわたるドイツ留学で、実に多くのことを学びとって、帰国後これまた実に多種多様の果実を捻らせた。そのなかでももっとも豊穡なる実のひとつは、海旭自身の造語といわれる「社会事業」だろう。では、海旭はそのための着想（ヒント）を、いったいここドイツで、いつ、どのようにして得たのか。

海旭は、正直なところ、留学当初、いや留学以前から、いわゆる「貧困問題」とその解決策のひとつである「救貧活動」に、それほど関心があったわけではない。留学前は既成仏教の革新運動に、留学してからは仏教の原典との格闘に主たる関心が向かったこともあるが、そもそも留学前は、「救貧」という実践活動についてはキリスト教の専売特許と受け止め、彼らにまかせておけばよいと思っていたところがあった。さらにドイツに来てか

らは、社会主義者たちとの交わりのなかで、「救貧」が新旧キリスト教よりも社会主義者たちの専売特許であることを知り、大いに啓発は受けたものの、実践は彼らにまかせておけばよい、あえて仏教の出番はないのではないかと、なんとなく感じていた。

そうした海旭が考えを改め、さらに積極的に救貧問題に取り組んでみようと思ひ直すことになったのは、たまたまベルリンの「貧民窟」を訪ねたのが機縁だった。

留学して二年目、海旭は師であるロイマン教授の薫陶よろしきを受け、学者にとって最難関にして最高の榮譽とされる哲学博士号の取得をめざしながら、仏教の布教にもつとめ、ドイツ仏教徒会の組織者として、はやくも欧州における「仏教伝道士」の中心人物に祭りあげられるまでになっていた。

たまたま比較仏教学の全欧州の学会がベルリン大学であり、そのついでに持たれたドイツ仏教徒会の集まりに出席。そこで、参加者

の紅一点から、海旭にこんな問いが投げられた。

「ここベルリンの労働者の悲惨な暮らしには目を蓋うものがあります。仏教徒として何かできないものでしょうか」

ブロンドの紅一点は、エルゼ・ブッフホルツという、畏れ多くもカイゼル（ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世）の遠縁にあたる女性だった。パリー三蔵に造詣が深く阿含経全部をドイツ語に訳したドイツの仏教学者にして「智三界」の法名をもつ仏教僧でもあるニヤーナ・チロカの直弟子で、チロカ博士に同伴してこの日の集りにも参加していた。（なお、海旭が帰国後、このチロカ博士とブッフホルツ女史は海旭を慕って連れ立って来日、チロカは宗教大学（大正大学の前身）、ブッフホルツは淑徳女学校（淑徳中学・高校の前身）で教鞭をとり、日本の仏教教育に貢献をする）すると海旭はいきなり「ぜひとも、そこへ連れていってもらいたい」と言って、質問者

であるブッフホルツばかりかその場の同志たちを等しく驚かせた。誰もが海旭がしかるべき仏教経典から「救貧」にかかわる記述を援用して高邁なる講釈を垂れてくれるものと期待していたからだ。

「ドクトル・ワタナベをあんところへご案内するわけには……」ブッフホルツ女史は手をふる、つづけた。「とても人間の住処とは言えないところです。ドイツ帝国の恥ですわ」

海旭は意外な面持ちで返した。「私の社会主義者の友人たちによると、彼らの長年にわたる運動のおかげで、労働者の暮らしはだいぶんと改善をされたと聞いているが……」

ブッフホルツは眉根を寄せて受けた。「たしかに当初、社会主義者や労働組合運動の連中は、政府に労働者のための住宅をつくらせたことを、われわれの成果だなんて大威張りでしたが、なんのことはない、あつという間に掃き溜めのようなところになってしまったのです」

「彼らにまかせておけばよいとこれまで思ってきたのだが——」と海旭は首をかしげた。

「良くなるどころか、かえって悪くなっているとは……。であれば、とにかく後学のためにもぜひ現場をみてみたい。ぜひとも、その掃き溜めへ連れていってくださらんか」

と、ブッフホルツは快えの色さえみせて、「実は私も行ったことがないので」と尻込みした。

今度は海旭が驚く番だった。「行ったこともなく、また行くこともせずに、仏教徒として何かできないものかというのは、いささか可笑しくはないですか」

ドイツ仏教徒会がいまひとつ伸び悩んでいる一因は、現実世界への報恩より仏教の哲理に惹かれるインテリ志向にあるのではないかと、海旭は内心反省しながら、「ぜひ、掃き溜めへ」と督促すると、チロカ博士がブッフホルツ女史に同伴して案内役を買って出た。

無惨なり、「赤いベルリン」

海旭が案内された地区は、ミューラー通りからライニケンドルフ通りへ抜ける界隈にある「赤いベルリン」と呼ばれる共同住宅街だった。住民のほとんどが社会民主党支持の下層労働者であることが名前の由来である。ただ広い敷地に五階建てのコンクリートの箱が延々と棟をかさねている。一棟ごとに中庭がついていて、ゲート付近のアパートの一階は商店になっている。

海旭がためらいもなくゲートを入ろうとすると、ともに上流階級の出で知識人であるチロカとブッフホルツは、明らかに気乗りがしないという風情で戸惑いをみせた。海旭が「さあ、入ろう」と促すとうやく海旭に従う。これではどちらが案内人だか分からない。中庭からは子供たちのにぎやかな声が聞こえてくる。海旭はそれに誘われるように、二人を引き従えて一番手前のアパートの中庭へ

と足を踏み入れた。その場に立ち止まって見上げると、あちこちのベランダから洗濯物がはためいている。

海旭は二人につぶやいた。「どこが掃き溜めなのか。私が幼いころ住んでいた長屋に比べれば、ずいぶんと近代的で住み心地がよさそうではないか」

それは海旭の正直な気持だった。幼少時を過ごした浅草田原町の棟割長屋、蛇骨長屋を思い出しながら、懐かしささえ覚えた。

「外からではわかりませんが、中は掃き溜めですよ」とブッフホルツが突き放すように返した。

昼日中なので大人の男は仕事に出ており、女は家の中で家事か子守りに余念がない。中庭は子供たちの天下で、ボール蹴りやら馬乗りやら工夫をこらして楽しんでいる。そこへ大人三人の闖入者、しかもそのうちの一人は初めて見る東洋人となれば、好奇心をそそられたのだろう、遠巻きに物珍しげに見ていた

子供たちの中から、年のころは十歳を超えたか超えないかの姉妹とおぼしき二人がそろそろと近寄ってきた。

海旭が腰をかがめて「やあ、こんにちは」と声をかけると、ぺこりと頭を下げて「こんにちは」と人懐こく応える。すかさず海旭は、「おじさんたちに君たちのお家を見せてくれないかな」と頼み込んだ。チロカとブッフホルツは海旭の単刀直入な所作に呆氣にとられて顔を見合わせたが、洋の東西をとわず子供とは無邪気なものだ。姉妹はにっこりうなずくと、三人を従えて自室へと案内してくれた。

最上階の五階まで階段で上がって姉妹の部屋にたどり着いた。姉妹はドアを開けると、白昼の闖入者に驚く母親を説得して、海旭たちを招き入れた。母親は乳飲み子に乳をふくませているところだった。海旭の第一印象では、部屋は一間、薪をくべるへつついが鉄製のコンロに、丸いちゃぶ台が四角いテーブルと椅子に代わっているだけで、海旭が幼少を

過ごした蛇骨長屋と似通っていた。ところがじっくり見渡してみると、広さとしつらえは似ていても、そこを支配している「空気」は大違いだった。

コンロの上には残飯がこびりついた鍋がそのまま。テーブルにはこれまた汚れたままの皿とコップ。たぶん次の食事の前に洗うのか、いや洗わずにそこへ次の料理を盛るだけなのかもしれない。新聞、くし、ブラシ、石鹸などがテーブルの上に散乱している。

外観を見たときに海旭は、蛇骨長屋よりも居心地がよさそうだとつぶやいた。いや、殖産興業をめざす日本には、働く庶民のためにこういう建物が必要だとさえ思った。しかし、中を訪ねてみて、それはとんでもない思い違いで、むしろ蛇骨長屋のほうがまだましかもしれないなかった。

蛇骨長屋の渡辺家では便所も洗い場も共同だった。しかし、これほどずさんではないなかった。ちゃぶ台は綺麗に拭かれた上に折りた

たまれ、台所の茶碗も内側はもちろん糸きりまで磨かれていた。洋服タンスなどなく服は壁にかけられていたが、きれいに洗濯されていた。

奥から空咳が聞こえた。見ると、ベッドに男が寝ていて力なげに海旭たちへ顔を向けたが無言のままだった。かわりに姉妹が説明をしてくれた。それによると、木工所の臨時工だったが、欠勤による収入減を恐れるあまり風邪をこじらせて肺炎をわずらい仕事そのものを失ってしまったのだという。

臥せている一家の主人の行く末を案じながら海旭はふと気になった。男が寝ている以外にベッドがない。他の家族はどうやって寝るのだろうか。まさか日本人のようにふとんを敷いて寝るのだろうか。姉妹に尋ねると、床に洋服を広げて寝て、病気の父親に添い寝する母親が五時におきたら、代わりにそこへめぐりこんで短い暖をとるのだという。

では、この乳飲み子はどこで寝るのかと海

旭が訝^{いぶか}ったが、答えはすぐに知れた。母親がたんすの引き出しを開けて、そこへさっきからむずかっている赤子を入れたのである。怪訝^{げん}な顔をする海旭に、姉妹の片割れが言った。「母さんはこれからお仕事なの。赤ちゃんはここに寝かせて、私たちで面倒をみるの」母親は出かけるために髪を手櫛で整えながら、つぶやくように言った。

「近所の酒場で皿洗いをしてるのさ。亭主がこんな按配だからね。これが病気でなければベッドを誰かに貸して、生活の足しにするのだけだ……」

またまた怪訝な顔をする海旭に、姉妹の一方が小声で、教えてくれた。下層労働者の住宅事情がひどくなるなか、夜間勤務の工員に昼間だけベッドを貸すか、逆に夜の仕事を見つけて通常勤務の工員にベッドを貸して小金を稼ぐことが横行しているというのだ。

「でも、うちはまだましよ、ここにいられるだけで」と母親は寂しげに笑った。「お隣が

いま空き部屋なのは、旦那さんの工場がつぶれちまって家賃が払えなくなつて夜逃げしたのさ。しかし、明日は我が身かもしれないわね……このままだと家賃が払えなくなつて、何時出ていかなくはならなくなるか……」

再三目で退出を促すチロカとブッフホルツを海旭もついに無視できなくなり、このあたりが潮時とみて、幼い姉妹と母親に暇を告げた。

帰りしな、多くの部屋は暑さで玄関ドアを開け放しているために、見ようとしなくても中が丸見えで、いずこも幼い姉妹の部屋と同じようにすさみきつていた。

ブッフホルツから「仏教はあの一家に何ができるのでしょうか」と尋ねられて、海旭は言葉に窮し、一呼吸おいてから、こう返した。「とりあえず今日の体験をもとにじっくり考えてみたい。ご両名、本日は、『赤いベルリン』を訪ねる機会をつくってくれてありがとう」

二人への礼は本心からだった。もしストラスブルクに学究のため籠もっていたら、恐らく「赤いベルリン」の惨状をつぶさに知ることはなかったろう。海旭にとって実に得がたい体験だった。ストラスブルクの人口は二十万たらず。かたやベルリンは、第二帝政がはじまったつい三十年前は九十万だったが、いまや新市街を入れると三百七十二万人にまで膨張していた。それは、急激な工業化によって地方の農村部から農民たちがどんどん流れこんできて工場労働者になった証しであり、それすなわちドイツの繁栄と同時に「赤いベルリン」の産みの親でもあった。

ベルリンからストラスブルクへ戻る列車の中で、海旭はブッフホルツ女史からつきつけられた「仏教はあの一家に何ができるのか」を胸中で反芻した。

いまわが祖国・日本は、さかんに欧米を目標にして、急な坂道を一息に駆け上ろうとしている。その中でもドイツは一番の優等目標

だ。しかし、目ざす坂の上には、一等国という「明」の陰に「赤いベルリン」という「暗」がまわりついている。それがわかっていてもドイツの背中をみてこのまま急坂を上るのか。遅れている国だからこそ、追いつこうとする国の「明」に張りつく「暗」もよく見える。「明」と「暗」をただただマネをするだけでは能がない。「暗」を避けるやりかたはないものか。

そこに仏教の出番はないのか。「救貧」を宗旨の一つとするキリスト教はどうなのか。「救貧活動」の成果を自慢している社会主義者たちはどうなのか。ひとつストラスブルクに帰ったら、新旧キリスト教徒、社会民主党員、さらには無神論の自由思想団の友人たちに、「赤いベルリン」の体験から湧き起こった疑問と問題意識を語って、彼らと意見を戦わせてみよう。そう海旭は思い立ったのだった。

(この項つづく)

第四十三回

江戸を歩く



四谷御門から
内藤新宿へ

大江戸ウォーカー
森 清鑑

大縄地

四谷御門を出て、外堀を渡ると向かいには麹町の家並み。外堀通りを左に曲がり、ちよつと歩くと右手に広い四谷大道が見えてくる。この四谷大道の行き着く先が内藤新宿である。江戸の道作りは、防衛のため常にジグザグに設計されている。四谷大道をちよつと進むと、早くも左手に御先手組大縄地が南に広がる。御先手組大縄地は、此処だけでなく、これから先、四谷大道を挟んで左右のあちらこちらに存在する。中には広大な大縄地もある。大縄地とは、同じ職務の下級武士が定められた広い土地に一括りにして住む処をいう。御先手組とは、主に弓・鉄砲組で構成され、戦時には、隊の先兵役を務める。このため、武勇のものが選ばれている。時代が安定してくると、彼らは江戸城御門の警護に当たることになる。長谷川平蔵でお馴染みの火付盗賊改方もこの御先手組に属する。

大道、最初の御先手組大縄地の家宅群を左（南）に折れると、四谷仲町通り。これを南に下ると、今度は右側一帯が御持組大縄地。御持組は、持弓、持筒（鉄砲隊）、持槍組に分かれ、一組、与力七名、同心五十五名で構成されている。御持組は戦時、主として將軍を護衛する。平時になると、御先手組と同じく、江戸城の警備にあたった。この御持組大縄地は、さらに南の鯉ヶ橋坂、徳川紀伊の居屋敷（赤坂迎賓館）まで連なっていた。こうした大縄地の存在は、当初、江戸城西側の防衛がいかに戦略重要拠点であったかを示している。江戸城の東南は海、川で防衛できる。地形的に最も手薄なのが西から北なのである。そこで家康は江戸入府後、ただちに城の西側防衛体勢を整備。四谷大道を挟んで北は市ヶ谷・高田の馬場まで、南は青山まで。連綿と御先手組や御持組の大縄地が配備されているのも、そのためである。

服部半蔵

再び、四谷仲町通りを四谷大道に戻る。左に見える御先手組大縄地の屋敷塀を通り越して、南に曲がると、そこは西念寺横町。これをさらに南に下ると浄土宗西念寺に着く。この寺を境にして西側は、一挙に二十数社の寺が続く寺町になる。つまり西念寺は先に述べた大縄地との境界線をなす。此処には服部半蔵の墓がある。服部半蔵正成。三河以来家康に仕えた徳川十六神将の一人。掛川城攻略、姉川の戦い、三方原の戦いで戦功を重ね、信長が本能寺で倒れた際、堺にあった家康を有名な伊賀越えを先導し三河に無事戻した。このため家康の信頼は絶大で、忌憚なき相談相手であったという。家康の江戸入府に伴い与力三十騎、伊賀同心二百名を付託され、八千石を賜る。彼は三河の生まれだが、父親が伊賀出身のため、伊賀の地理に明るく、伊賀同心の元締めを継ぐ。本人は忍者などではなく、



◆散歩図

槍術の達人であった。四谷大道はこの先甲州街道と直結しており、事が起きれば重要な戦略地点。外堀の四谷御門からそのまま東の江戸城に続く道が麹町通り。そして城を囲む内堀。家康は信頼する半蔵に此处に屋敷を与え、防御体勢を固める。半蔵門、半蔵堀。

当初、西念寺は、家康の依頼により、彼が赤坂清水谷に創建。後にゆかりの此処四谷に移転したものである。西念とは、彼の戒名からとったもの。西念寺建立を依頼した、家康の命とは、不本意な切腹を遂げた長男信康の菩提を弔うことにあつた。そのため、同寺には創建当初から信康の慰霊塔が建てられた。実は半蔵は、信康切腹の際、家康に介錯かいさくを頼まれる。ところが主に刃を向けられようかと落涙し、ついに果たせなかった。家康はこれを聞いて益々半蔵への信頼を深めたという。この時の様子を大久保彦左衛門是三河物語に記している。その後も服部家の家臣が半蔵門から四谷御門沿いを固めることになる。服部



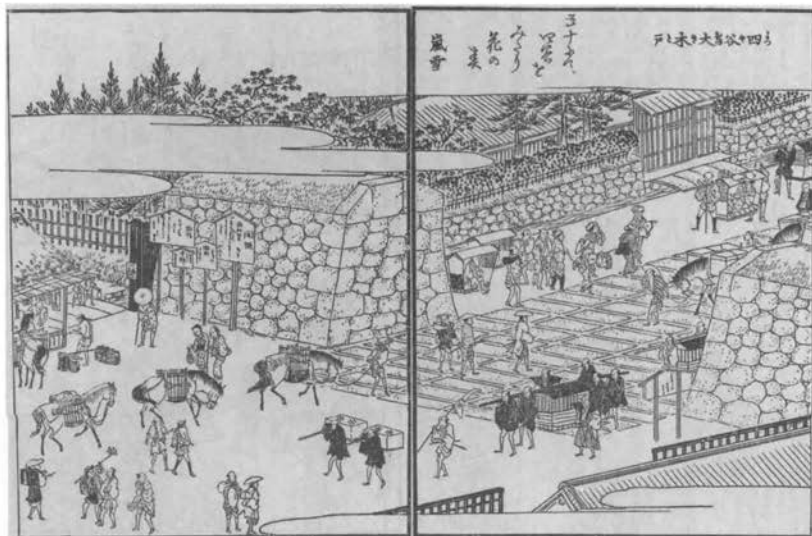
半蔵正成は慶長元年（一五九六）に没する。彼の墓は譜代家臣に相応しい立派なものである。

西念寺北側の、細い急な坂道を下ると観音坂に出る。右手には真成院の高い石垣。この寺は汐干観音を祀っており、ここから南に降りる坂を観音坂といった。降りていくと、右側は、区画整理された鮫ヶ橋谷町の家並みがびっしり。左側は御持組大縄地。急な観音坂の下は谷底のような平地になっており、鮫ヶ

橋谷町の家並みが形成されている。この町並みを割って西へ。今度は谷から上り坂になる。これが戒行寺坂である。登り切ると右側に戒行寺がある。高台に本堂。起伏に富んだ四谷の地形を彷彿とさせる。戒行寺は、長谷川平蔵の菩提寺である。平蔵については中村吉右衛門の「鬼平犯科張」（池波正太郎）で馴染み深い。このドラマでも、元盗賊を蘇生させる彼の見事な人材活用がひと味違った平蔵の魅力となっているが、彼は単なる鬼の平蔵ではない。彼の最大の功績は、石川島に「人足寄場」を設置したこと。見所のある人間に手に職を身につけさせ復活させたことである。人足寄場は、明治維新まで続いた。この、世界に冠たる組織によってどれだけの人々が復活を果たしたのか。戒行寺（日蓮宗）には代々の長谷川家の人々が眠っている。

於岩稲荷

この道をそのまま西に歩くと寺が続く。法



◆江戸名所図会「四谷大木戸」

恩寺、本性寺、顕性寺まで来て右側を見ると、於岩稲荷がある。辺り一帯は四谷大道まで御先手組の広大な大縄地。その中に稲荷はある。ここはもともと幕府御家人田宮又左衛門の屋敷であった。彼は、家康江戸入府とともに三河からこの地にやってくる。於岩は娘。婿養子として伊右衛門が入籍。この夫婦は大変仲がよい。家が大変貧しかったので於岩は家計を支えるため商家に奉公。日頃から屋敷内にあった稲荷を熱心に信仰。こうした夫婦の努力の甲斐あって家運は回復。繁栄を取り戻す。このことが近所の評判を呼び、稲荷を拜ませて下さいという人が続出する。田宮家は屋敷を開放して新たに稲荷祠を建立する。於岩と稲荷にあやかうと参拝に押しかける人々の数は増える。やがて於岩明神、四谷稲荷、左門町稲荷などと呼ばれ有名になる。つまり於岩は賢夫人の代表であった。寛永十三年（一六三六）於岩は亡くなるが、家を復活させた於岩の信仰はますます評判になる。於岩の死

後約二百年を経た、文政八年（一八二七）、鶴屋南北は、江戸庶民の信仰を集めている於岩をモデルに「東海道四谷怪談」を書く。これ以降、於岩は怨念の固まりのような幽霊に化身してしまう。名は全国的に広まったが気高い於岩の生き様と精神は全く逆のレッテルを貼られてしまうことになる。

四谷大木戸と水番所

於岩稲荷を過ぎて右へ曲がる。大縄地を割って細い道が四谷大道まで続く。周囲は御先手組役人の家宅が密集している。左門町通り。今日の信濃町慶応病院から四谷三丁目に出る、広い左門町通りとは隔世の観がある。

再び四谷大道に出て、西に進む。左右に四谷塩町の家並み。やがて有名な四谷の大木戸がある。この辺り、右側一帯は徳川田安中納言の下屋敷（約九千三百坪）。大木戸から大道に沿って南一帯は広大な高遠藩内藤駿河守下屋敷（約六万七千坪、新宿御苑）。

四谷の大本戸は言うまでもなく甲州街道、青梅街道に通じる要所として元和二年（一六一六）に設けられた。両側にがっちりした石垣が聳え、夜になると頑丈な木戸門が閉ざされた。江戸が安全になった寛政四年（一七九二）に木戸門は撤去される。だが通行人や荷物を取り締まる検問所であることに変わりはない。甲州街道からやって来た人にはここが江戸の入り口であり、旅人にとってはここからが江戸外。旅立つ人の見送りもここまで。ここは東海道、高輪の大本戸と並ぶ重要な検問所であった。同じように何本もの高札が立ち、茶屋が並ぶ。木戸の間口は僅か四・五メートル。中間が先に立ち、籠が続く旗本の行列。武士、町民、荷物を背負った馬の行列。雪旦は江戸後期の様子を克明に描いている。

玉川上水

この大本戸石垣に接して南にあったのが水番屋（水番所）である。これこそ江戸城西側

及び南側一帯に飲料水を提供した玉川上水の管理所である。多摩川羽村取水堰で取られた水は露天のまま、この水番屋構まで流れ来て、ここから地中に入り、石樋あるいは木樋を通して江戸城内あるいは町民の自宅に給水された。時代劇で長屋の井戸から水を汲み上げるシーンがよくあるが、これは石樋を通して地下を流れてきた水を汲み取っているわけであ



◆広重「玉川堤の花」

る。江戸には無論井戸もあるが江戸の中心部は大方海を埋め立てており塩分が強く飲料水に適さなかった。

江戸の水不足を解消するために羽村・四谷大木戸間の玉川上水が完成したのが承応二年（一六五三）。そして翌年に江戸市中に上水が配給される。総奉行は知恵伊豆こと松平信綱。工事の現場監督は庄右衛門、清右衛門兄弟。なにしろ多摩川羽村取水堰から四谷大木戸までの高低差はたったの百メートル。信綱は家臣の川越藩士、安松金右衛門を設計技師に起用。安松の土木設計は秀逸。しかし、現場を指揮する庄右衛門、清右衛門兄弟の苦勞は並大抵のものではない。高井戸まで掘ったところで幕府資金が底をつき、兄弟は家売り、資金を補充するという有様であった。この功あつて幕府は兄弟に玉川の姓を授ける。

僅かな勾配を狂いなく掘上げた土は上水道の左右の土手造りに使われ、ここに桜の木が植えられる。桜の花見の名所と成る。それに

しても四谷大木戸まで露天なのだから、水の管理は厳正を極めた。ごみの処理、管理。汚物など投げ込もうものなら極刑に課せられた。四谷の水番屋では、なにしろ此処から地中に入るのだから最終的な水の浄化が行われる。さらに此処から余水を、内藤下屋敷（新宿御苑）を抜け南に流す。これを玉川上水吐という。この水は千駄ヶ谷、穂田村を通つて渋谷川に行く。水番屋では適時吐水の水量を調整する。玉川上水はこの近辺では甲州道中の南側を並行して走っている。広重の「玉川堤の花」は内藤屋敷の北西部を流れる上水を追分に向かつて描いたもの。上水の右側は内藤新宿仲町の家々、左には内藤家臣団の屋敷。大勢の町民、武士が入り交じつて桜の花見と洒落ている。

（つづく）

本願と申すは、阿弥陀仏のいまだ仏になりたまわざるむかし、法蔵比丘と申ししいにえ、仏の国土をきよめ、衆生を成就せんがために、世自在王如来ともうしし仏のみまえにして、四十八の大願をおこしたまいしそのなかに、一切衆生を往生せしめんがために、一つの願をおこしたまいける、これを念仏往生の大願とは申し候なり。

（法然上人『大胡太郎実秀が妻室のもとへつかはすご返事』）

本願とは、昔、阿弥陀さまが仏となられる以前、

法蔵菩薩というご修行中の御身でいらつしやつた頃、

清らかな仏国土を建立し、そこへ人々を救い導こうとして、

世自在王という名の仏さまの御前で、四十八のおおきな誓願を立てられました。

その中に、あらゆる人々をその仏国土（極樂浄土）へ往生せしめるための願を誓われました。

それが「念仏往生の大願」といわれるものです。

浄土を憧憬した燈籠の大臣

NHKの人気番組「大河ドラマ」、今年は平家を一大武士集団に築き、武家政権を立てた平清盛だ。テレビではまだ幼少の時分の話だが（本稿執筆時）、今後どんな展開でその人となり、そして生きざまが描き出されるのか楽しみだ。

平治の乱（一一五九—一一六〇）での勝利を機にその力を確かなものとしてゆく。もしかすると清盛のモチベーションには、『平家物語』の記述からうかがえる悪逆、傲慢といった、彼の持ち合わせた「性」が多分に影響しているのかもしれない。「二人の父親」を持つという、複雑な出生と関係もしていようか。もともと、『物語』に記された、清盛に対する評はそのまま鵜呑みにすることはできない、おだやかで義理がたい面も多分にあった、との見方もされており、もとより筆者などにはいずれが正鵠を射たものか判じることなどできないが。

ここで取り上げたいのは、実は清盛ではなくその嫡男・重盛（一一三八—一一七九）のことだ。若い頃は数々の戦で功名を上げ、左近衛大臣、正二位内大臣の位にまで昇り、清盛引退後には平家の棟梁としての役を担うことになるが、義兄・藤原成親が首謀したとされる「鹿が谷の陰謀」（安元三年Ⅱ 一一七七）の後にはその影も薄くなっていく。その後、体調を崩したというが、それも頷ける。こともあろうに自分の妻の兄が、妹の嫁いだ一族の打倒を企てたのだ、

シヨックも怒りも尋常であつたはずはない。面子だつて丸つぶれた。『陰謀』

から二年、わずか四十三歳という若さ、志半ばで父よりも先んじて没している。

自らの死期を悟つたのであろうか、亡くなる三日前に出家、僧名淨蓮を名乗る。

入道相国の、さしも横紙を破られしにも、この人のおはして、様々に宥め

宣ひつればこそ、世は今日までもおだしかりつれ（中略）凡そはこの大臣、

文章麗しうして、心に忠を存じ、才芸勝れて、言葉に徳を兼ね給へり——。

『平家物語』第三卷に記された重盛の人物描写である。「横紙を破られしにも」

とは、縦に裂けばなんのことはない紙を、無理に横に破ろうとする、つまり無理なことをする意。そんな入道相国（清盛）のもとでもなんとか世が穏やかに

保たれてきたのは、重盛がいたからこそだというのだ。文章に長け、忠心篤く、

才芸にも秀で、言葉遣いも優しく上品であつた、ともいう。

さらに重盛は「滅罪生善の志」も深かつたと『物語』は語る。京都・東山の

麓——小松谷（清水寺の南）にあつたとされる別邸に四十八間の精舎を建立し、

一間に一つずつ燈籠を吊げ、毎月十四、十五日には「大念仏」を修したとある。

大勢の僧侶を招き共々に高声に念仏を称えたものであつたろう。「四十八」に

こだわったのは、阿弥陀如来が立てた四十八の誓願にあやかり、極楽往生を遂

げるためであった。一間ごとに「眉目みめよく若わかう盛もなつし女房を請まねじ」たともあるが、それは極楽で仏の功德を讃える飛天（天女）になぞらえたのであろうか。往生の安心あんじんを得たいとの思いが、現前に極楽浄土を再現することに傾注させた。重盛が「燈籠とうろうの大臣おとし」と呼び親しまれていることには、こんな背景がある。

重盛が徳高く描かれているのはいささか粉飾めいていると指摘する向きもあるようだが、極楽への熱き憧憬は確かだったろうと思える。後半生の波乱と罹病がそうせしめたのであろう。父親の絶頂を見、自らもまた頂点に到達せんとしていた彼が目当たりにした無常の実相とその悲哀——きつと、それら混沌とした想いが極楽往生を期せんとする深き信心という形で表れたに違いない。

「生善の志」は、『物語』の中の「金渡」の項を開くとより具体的に知ることができる。一人の船頭ふながねに金かねを持たせ、宋の国の育王山いくおうさん欣山寺の僧に寄進したという。これもまた往生のための積善しやくぜんであった。

「重盛はその返礼に阿弥陀如来像を賜り、余命わずかとなった頃、重臣貞能さだよしにこれを託した。壇ノ浦後、貞能は重盛の形見となった如来像を大切に携え、追っ手の目をかいくぐりながら奥州へ。名を定義と変えて一寺を建立した——」。

一説では、こんなふうにならされている。

（小村正孝）

「法然上人をめぐる人々」

師
を慕う

親
鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第八回

一瞬、互いの言葉が途切れた――

二十一

一瞬、互いの言葉が途切れた。

「肝要の一事は念仏を一心に称えることにある、というのが聖者法然房が辿りつかれた教えにございます。み仏は出家在家を区別して往生させるのではなく、ただ一心に念仏して縋ることこそ、われら凡夫が往生する道と教えられております」

「そんなことは遠の昔から余も法然から聞いておる。しかしな、兼実。あまりに先走った教えとは思わぬか」

あいかわらず後鳥羽は息巻いて言った。

「法然房からは繰り返して、【み仏は人生の道として出家在家を区別せず、ただ念仏が称えられるように生きよ。独身で称えられねば結婚して称えよ】と教えられました。わたくしは凡夫でございます。法然房を信じ、その教えに縋って生きて生きたいと存じます」

「もとより凡夫ゆえに法然の教えに縋らざるを得なかったのだから。して親鸞とやらに嫁がせた娘の名は何という」

「玉日と申します」

「それはまた大仰な」

後鳥羽はあざ笑った。

「アハハハ。しかしその甲斐も無かったというものだ。親鸞とやら、法然房の弟子ながら、叡山の修行が辛うて逃げ出したならず者というではないか」

「娘の名は玉子と申しておりましたが、僧侶の妻となりますからには、我人のために尽くすという覚悟がなければなりません。そこで親鸞と結婚するにあたりまして、その覚悟を新たに生きよと、わたくしが改めて【玉日】と名づけてやった次第でございます」

後鳥羽は不機嫌そうにそっぽを向いた。兼実のことは何から何まで上皇の気持ちを逆撫ですることばかりであった。

「ほう、兼実にしては殊勝なことを心掛けた

ものだ」

さつきから兼実に押され気味で不快極まりない気持ちであつた後鳥羽は、精一杯の皮肉をいった。

実は兼実が娘の名を【玉日】と改めさせたのには訳があつた。

法然上人の許しを得て玉子が親鸞と結婚することに決まつた夜、彼は不思議な夢を見たのである。光り輝く太陽の側らに法然上人とおぼしき人がいた。法然上人からも光りが発していた。そしてそのかがやく光の下に玉子がいたのである。光りを受けているにもかかわらず、光りを仰ぎつつ玉子はまぶしくないようであつた。

ハツとして夢から覚めた兼実の心に、その時ふいに浮かんできたのが、【玉日】という名前だったのである。

「玉子、いや玉日、親鸞様の妻となるからには、夫によく仕えるとともに、今日から世の人のために生きねばならぬ。それが、そなた

に与えられた運命である」

夢の話を読み聞かせつつ兼実は娘に言った。

二十三

一時^{いつとき}ほど話して兼実が帰つた後、眠れぬままに後鳥羽はつくづくと考え込んだ。

（親鸞は法然の弟子になつた年月は短いものの法然の信頼極めて厚く、師匠の画像を描くことさえ許された高弟だという。

そして親鸞の結婚は、多忙な法然に代わつて、玉日の亡母の法要に赴いた親鸞を、やがて玉日が恋い慕うようになった。そしてそのことを知り、母を失つた娘の行く末を案じた兼実が、法然の教えを思い出し、娘の将来を託すに足る男として親鸞を見込んで法然に願ひ出た。

法然は親鸞に彼自身の意向を訊ねたところ、法然の教えを基に、彼自身も僧として妻

帯したいと言ったというのだ……)

初め後鳥羽の心は親鸞も死罪という気持ちに傾いていた。法然は遠流であらう。

しかし二人の無実を訴える兼実は、所領のすべてを朝廷に返上してでも、といって二人の減刑を願ったのである。

「京の内外に多くの帰依者を持つ法然を処罰しては、源平の争乱がようやく静まった今、ふたたび騒動が都で起こりかねませぬ」とも兼実はいった。

どうすべきか……

後鳥羽は迷った。(法然房の言うとおりに、もし在家出家の別なく、出家者が公に妻帯しても仏道に反しないならば……) 後鳥羽は迷った。

(親鸞を死罪にすれば、この後鳥羽に仏罰がくだるのではないか……)

兼実が来た時には怒り狂っていた後鳥羽は、次第に心が静まってくると、そうも考え出されてきた。

考えが行きつ戻りつした挙句、遂に後鳥羽は結論を出した。

法然は遠国土佐から兼実の領国讃岐へ。親鸞は死一等を免じて越後へ。

後鳥羽の心はようやく晴れた。

二十四

話を建暦元年(1211)の師走も晦日の夜に戻さなければならない。

さつきまで降りしきる雪の音が、夜が更けるとともに鎮まった。

雪に包まれてあたりは深としてゐる。

炬の火に手をかざしながら、親鸞夫婦はかつての日々を想い、そして今後のことを話合っていた。

過ぎ去った昔。法然上人とともあつた懐かしい、かの日々……

しかし夫婦は明日から開ける新しい道をどう歩いていくか、考えねばならなかった。



この大雪が融ける日、家族を連れて法然上人にまみえるために京に行く。

それだけははっきりしていた。

だがその後、以前のように法然上人の弟子の一人としてその御身近に置いていただけるだろうか。

もとより、お上人様はかつてに変わらず親鸞を側近くに置いてくださるであらう。

しかし、しかし、法然上人に帰依する多くの弟子たちの、親鸞に対する怒りと恨みは深く、この歳月、親鸞に対して以前と変わらぬ眼差しをむけているのは、法蓮房信空と勢観房源智、そして道蓮や道遍ほか数名に過ぎない。

—お上人様を流罪にまで追い詰めたのは親鸞だ！親鸞が僧として勝手に妻帯したのが、そもそもの始まりであった！

—お上人様から、綽空というありがたい出家名を拝領していたものを、親鸞なんぞと思

上がった名を勝手に改名してお上人様に許しを迫ったそうだ。彼の思い上がりのほどを許すことは出来ぬ。

—お上人様をはじめ、われらは日夜辛苦して念仏を称え、修行もしておるものを、彼は家族団らんで僧とは。

—そもそも専修念仏が弾圧されることになったきっかけは、叡山でも南都でもなく、親鸞にあったというではないか。

—そうよ、叡山・南都の訴状だけならば、朝廷とお上人様を遠流にまで処罰するはずはない。

—これは公家たちから聞いた話だが、院は還俗せずに勝手に妻帯した親鸞をえろう怒られてな。本来は死罪になるはずのところを、月の輪殿の嘆願でどうにか越後行きになったそう。

—法然上人様がお気の毒でならぬ。あのお年でろくでもない弟子を持ったばかりに遠流とは。

—とばかりを受けたのはお上人様ばかりではないわい。われらとて親鸞のおかげでそれほど辛苦したか分からぬわ。京では石まで投げつけられてな。

もとより、越後の親鸞は弟子を名乗る者たち一人ひとりの感情のすべてを知っているわけではない。

しかし建永元年二月十八日、越後遠流の処断があつて京から出立する朝にも、多数の見物人の中には法然上人の弟子と見覚えている男たちもいて、彼らが親鸞に向かって石を投げ、罵^{ののし}り騒ぐ姿は、親鸞のまぶたに残っていた。

親鸞は真実、人々から石持て追われるようにして処断の地に赴いたのである。

当時、流人は家族を連れて配流地に行く決まりであつた。親鸞には妻の玉日が行くべきであつたが、亡母に似て身体の弱い玉日は京に残り、玉日の侍女の恵信が身代わりとして越後に行くことになつたのであつた。

まずはお上人様にご挨拶し、お詫び申し上げるために京に行かねばならぬ。しかしその後、長く京にとどまつていられるか否か、留まつては却^{かえ}つてお上人様にご迷惑がかかるのではないか。

親鸞は不安であつた。

眞壁保育園

園児の句集

三歳児

ゆきふつてわたしよろこぶみなこまる

あおいそらしろいひこつきみつけたよ

おしょうがつしらないひとがいつぱいだ

ゆきだるままけてうれしいせいくらべ

とうみんのかえるがねてるつくばさん

みつけたよまんまるつきにうさぎさん

渡辺彩華

田中佑築

飯山未季子

塚原 華

稲葉柚乃

保科愛斗

四歳児

しもばしらせなかのばしてたっている

にこにこはしあわせよぶおまじない

ババママとおしくらまんじゅうあつたかい

高久翔愛

仁平真矢

小河原一飛

五歳児

どんぐりはみんななかよしひとりじゃない

ふゆのあさサクサクなるよしもばしら

ランドセルおそらのじいじみてるかな

たいやきをどこからたべようなやんじやう

どんどこやきみんなのねがいかなうかな

渡辺泰基

青木 優

富田多恵

成川拓摩

寺崎 旭

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●海

〔特選〕海底の藻のしなやかに海鼠揺る

井村 善也

箱眼鏡で覗くと、海底に伸びた藻が揺れ、その間に確かに海鼠が潜んでいる。「に」がやや気になりはするが、海底の様子、海鼠取りの様子をよく伝えている。海鼠取りの経験のない者には掴めないところだろう。

〔佳作〕瀬戸内は母の海なり日脚伸ぶ

河合美佐子

初明かりして海へ向く椅子ひとつ

村田 篠

海沿いのホテル聖樹を低く建て

増田 信子

●鳥

〔特選〕長き夜の木目が鳥となる童話

相沢 奈津

秋の夜長を部屋に籠っている。無聊さに柱や板の木目を眺めていると、その一つがふつと鳥の形に見えた。あるいは鳥になる童話が

あるのだろうか。いずれにしても連想の飛躍を大いに楽しめばよいのである。

〔佳作〕

着ぶくれて鳥籠洗う男かな

柿内美奈子

初島の鳴いて海より夜の明けぬ

浜口 佳春

釣り池を鳥影渡る日の短か

石原 新

●自由題

〔特選〕

海光の浜に牡蠣打つ異人かな

さとうゆう

養殖の牡蠣が上がってくると、殻の掃除その他実に忙しいのである。この頃ではその人手を外国に求めることが多くなった。今では珍しくないことだが、作者はこんな所にといいう思いで眺めたのだろう。

〔佳作〕

水底に気泡生まれる冬日向

永井 昭彦

一戸又庵家となりぬ秋の風

山口 信子

傘さして霰の的となりけり

寺下 忠至



誌上句会〈編集部選〉

■海

雪冠り入日に映ゆる鳥海山
海底の真中の駅夏休み
朝霧の海面を覆い散消えぬ
耳うすく海への雪を見ておりぬ
寒の雨打てば響けり海の宿
身の芯に孵すものなく雪の海
冬の世の蛇しんしんと海渉る
あは雪の海へ金魚を放つ夢
蓬萊に海の明るさありにけり

■鳥

裸木に對の鳥きて冬日向

佐藤雅子
平牛喜孝
森 弘三
山本誠二
横山文子
遠藤 愛
多賀慎平
内野瑠美子
水内麻奈美

浄土誌上句会の お知らせ

締切・二〇二二年二月二十日

発表・『浄土』二〇二二年五月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

我聞自由題

親鳥に尻を押されし巢立鳥
すでに息絶えたる真夜や雪の声
背にひとと鳥の影ある寒詣
電線に鳥のふくらむ雪景色
色鳥を待てど来たらず休刊日
旗日かなぶかぶか鳥の日向ぼこ
毛布から鳥類学者現るる

■自由題

朴落葉舞う参道を犬過ぎる
ほととぎす一声聞きたや子規の庭
名月や一本松を見守りぬ
染み込みて悲しき涙古位牌
困の匂いをさせて手紙くる
息吸うて声出すまでの枯野原
画面から声のして年改まる
山深きふるさと葱汁は温し
鰯ちりの鰯の見えたり隠れたり
すき焼の卵が並ぶ大広間
橋ごとに駅どの駅も雪の駅

平牛喜孝
新島敦子
安住優香
牧田早苗
長谷川裕
柴田由紀子
村田 篠

佐藤雅子
森 弘三
平牛喜孝
飯島英徳
村田 篠
富永那美子
中野安芸子
富谷隆弘
相川 保
手嶋 茜
横山文子



かい目

さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



冬極み春遠からずと折りあぐ

岱潤

暮から正月にかけ諸々の雑誌に、昨年三月二五日頃に、福島原発から三〇〇キロ圏内全員の移住を、政府が考えていたという最悪の計画があったことが報道された。三号機、四号機の更なる爆発があった場合とのことだった。三〇〇キロ圏内にはもちろん東京もすべて入る。

また、三月十五日には政府発表はなかったものの、相当高い濃度の放射能が東京に飛来していたことは、最近当然のように語られるようになった。

こうした災害に対する当事者観は、人々の心を大きく変えるようだ。上田紀行氏

の話だが、氏の勤める東工大で東南アジアで日本企業が工場から流す廃液に毒物が含まれているため、下流域の人々が大勢病気になるというビデオを見せて、貴方がその会社の社員ならどうするかという問いをしたところ、一昨年まででもないという学生が九割もいたのが、昨年は四割弱に減少し、匿名でも内部告発をするという学生が画期的に増えたことを教えてくれた。

昨年の漢字一字は「絆」だった。しかしこの「絆」は、何のための絆なのかで大きく意味が違ってくる。当事者が感じた絆はかけがえのないものだったに違いないが、同調圧力に屈した絆は方向性を

見失った危ないものになってしまふ。家族や友情だけが絆ではなく、戦争時の国民総動員も同じ絆だ。

我々は「絆」を常に、当事者の感覚で考えなければならぬだろう。（長）

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十八巻 二三月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十四年一月二十日

発行 平成二十四年二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了咄

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

室津

法然が四国に配流の際、京都を出発したのは承元二年（1207）の3月15日で、この室津に着いたのは3月18日である。

室の津に出入りする船人の旅愁を慰めていた「友君」という遊女がその噂を聞き小船を出して教えを請いに法然上人をたずねたのであった。上人は

念仏の功德を説いて歌を書き与えた。

仮そめの色のゆかりの恋にだにあふには身をも惜しみやはする

（かりそめの恋であっても、愛する人に逢うためには命を惜しまないだろう。ましてや仏法もいてをや。）

わたしのような卑しい女でも、弥陀の救いはうけられる。

そう思うと、友君は嬉し涙にぐれながら何度も何度も、上人の船をふり返り、室の泊の方にかえっていった。



法然上人鑽仰会の



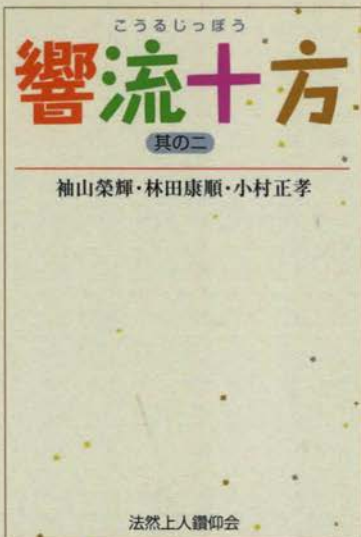
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より